

狩野派のモチーフ配置・形状による鑑賞視線の 展舒の方向性に関するノート

A Study of Development of Eye Guidance with Motifs in the Kano School

池田洋子
Ikeda Yoko

はじめに

1. 正信
 2. 元信
 3. 永徳
 4. 光信
 5. 探幽
- 結語

はじめに

永徳筆聚光院室中花鳥図襖は室内の東南角にある竹から梅・滝・松・啄木鳥・松・芙蓉・来雁・蘆雁とモチーフにより視線が次々に継承されて視線がめぐる。同時にそれは季節が春から夏、秋、冬と巡っている。その方向は右から左へである。これは梅樹が紅花に描かれていることから日本的な志向によると考えられる。それと祖父元信晩年に見られる花鳥モチーフによる視線誘導の方向性との関係はいかがであろうか。また、孫の探幽が「室町回帰の方向性」を打ち出したというとき、水墨画に見られる初発性を意味すると考えられているが、回帰の中にモチーフの視線誘導の方向性はいかがであったろうか。

そこで、ここでは正信からはじまり、元信・永徳・光信・貞信・探幽までの障壁画におけるモチーフの配置や形状から視線誘導の方向性を確認して、障壁画モチーフ配置に見られる狩野派画家の時代的な変化を記述していく。

1. 正信 (1434 ~ 1530)

1463(寛正4)年に相国寺塔頭の雲頂院に観音・十六羅漢図壁画を正信が描いたことが記録上¹にはある。遺作としては、屏風6曲1隻の《竹鶴白石図屏風》があり、それについて見ていく。

《竹鶴白石図屏風》(図1)

左から竹、松、岩、鶴とモチーフが順に右へと並び、右下の葦と岩に終る。左の松は上方を画面外に続けて消え、そこから枝が

右下へ降りてくる。松の幹にはつがいの雉鳩が互いに向き合っている。右端近くの岩にセキレイが一羽とまり右を向く。画面の左下に多くのモチーフが集まり、右上は遠山が描かれて、右下の岩のモチーフから奥が霞んだ水景になっているモチーフの少ない画面空間としている。

岩のモチーフの描法で峻が右下さがりになっていて、右さがりの対角線の方角への視線の誘導を鮮明に見せている。

モチーフの配置や描法により鑑賞の視線に 左から右への展舒の方向性を与えている。

2. 元信 (1476 ~ 1559)

元信には《四季花鳥図屏風》(白鶴美術館)など多くの作品があり、大徳寺大仙院と妙心寺雲雲院に代表的な障壁画を残している。

大徳寺大仙院1513(永正10)年(図2)

衣鉢の間²:《禅宗祖師図》(図3)東南面6面である。

東面の画面左端の舟が左に向おうとしている。しかし、人々の視線は右に向かう。水を挟んで、香巖³が竹の破裂音を耳にするところで人物の視線が右に向く。南面に曲がり、桃花を見る志勤⁴の顔が右上を向く。瀉山⁵が瓶を踢した後に、顔を右に向けている。水を挟んで弓を向ける石鞏⁶が左を向いて、画面の進行が終わる。人物図であるので、人物の顔や視線の向きがそのまま画面に鑑賞の視線の展舒の左から右へ進む方向性を与えている。

檀那の間:花鳥図(図4)北東面各4面 計8面である。

北面の西から錦鶏鳥の赤と黄色の胸色の2羽が視線を右に向ける。その先に芙蓉の花が咲くとなりの薔薇の枯れ枝に小禽がとまり顔を下に向ける。その視線の方向に鶴鴒が右に視線を向ける。その視線の先に松の枝端が現れその枝をたどると、枝の上に2羽のつがいの鳥が互いに向き合う。その上部に松の枝が掛りその上に薄っすらと松葉が描かれ、そこに向かう雀が羽を広げ飛んでいる。画面中央の奥にある左右から重なり合う雪山から流れるたっぷりした水量の流れが画面下部の崖に強くぶつかる様

¹ 『蔭涼軒日録』蔭涼軒主季瓊真薬の注文による住房雲頂院の壁画

³ 香巖智閑掃除中に瓦礫の竹を撃つ音を聞き悟る

⁵ 瀉山靈祐が浄瓶への一語の求めに対しけり倒して去った

⁶ 石鞏が義忠に弓を構えたので義忠が胸を開いて「人を殺すか活かすか」と問うた

² 仏間との境が一間であった調査報告書がある。

⁴ 志勤が桃の花を見て悟る

子が見られる。

誘導される視線が左から右への展舒の方向性をもつ。

部屋が東面に折れて襖が続いていく。鳥のとまる松枝は太い幹に続き、そこに鵲3羽が遊ぶ。根元近くには啄木鳥がしがみつく。松枝は右にも伸びそこに1羽の鳥がとまり、この3羽に視線を向ける。鳥たちの視線は下を向き、下にある瀑布の滝つぼに向う。松の根元のピンクのカンゾウの花が咲くところに垂直に落ちる瀑布のしぶきが飛ぶ。この瀑布の水が北面の水流ともなって左右に流れていく。カンゾウの横に笹が葉をすべて右にして、落ちる滝水の起こす風圧に背を向ける。

この笹の葉の示す方向には黄色の胸毛と赤い背羽根を鮮やかに吐綬鶏のつがい岩の上に水景の前に互いに向き合いたたずむ。右横には大輪の牡丹が咲き誇る。牡丹の蕾の付く枝がずっと背を伸ばした先には左上から伸びた松の枝が小禽をとまらせる。この小禽が右に向きその目が追うのは、空中に飛ぶシジュウカラである。その1羽は頭を下に向ける。すると下の水際には鴨が顔を上に向けて呼応する。鴨はつがいとゆったり水面を滑るように左に進む。その後ろにもう1羽の鴨が水中に頭をおじぎをするように折り曲げて入れる。水上の鴨のつがいの片割れが見る方向には赤い牡丹の花が鴨の方向に頭を垂れる。その指し示す右方向には梅の枝先が視線を受け取る。枝をたどると羽繕いをする赤い胸毛に緑の羽根の鳥と、尾の長い薄黄色の胸毛をしたカササギがとまり視線を左に向ける。

東面は各襖ごとに視線が完結するかのごときで、はっきりした視線の展舒の方向性は弱い右へと伸びる。

妙心寺霊雲院 1543(天文12)年(図5)

室中：《四季花鳥図》(図6) 東北西3方各4面計12面である。

西側南から、土手に生える柳の木が右に向けて伸びる、一旦画面外にでた柳の枝が燕を乗せながら再び上から下りて右下に向かう。その下に鶴が視線を右に向けその先に燕が飛び交う。燕の下の水辺には鴨が1羽左に向けて泳いでいる。岸近くの水にも2羽の鴨がいる。最後の1羽が頭を返して右を向く。その岸を上がると岩崖になりその上に番の雉がいる。1羽は左を向くが、右の1羽がやはり頭を返して右を振り返る。その視線に導かれ、右下の芙蓉の花が咲くところに向かう。

角を回ると北面になる。そこには枯れ葦の陰に雁が群れている。そのうちの幾羽が右上を向くとその先に空から下りてくる雁が3羽いる。それは画面中央に描かれる遠い向こうの雪山からやってくるようである。来雁は目線を蘆雁に反し、その集団から今度は視線がまっすぐ右に向かう。

その先に右に這う松の枝先が見え、太い幹の上に片脚で立ちあがっている鶴が左に顔を向けてここで視線の展舒がとまる。かろう

じて、鶴の立つ松の枝が右に向って伸び、その奥の灌木は右に枯葉の付いた枝を向け、その後方にある岩の上にいる3羽の山鳩は左を向き、視線の展舒の方向性は左である。

その奥に崖、更に奥に崖に挟まれて滝が垂直に落ちている。勢いよく滝壺に落ちる水は跳ね返ってはいなく霧の中に包まれて見えない。しかしここから水流が2手に分かれているらしい。鶴が片脚で立っている這うような松の幹の下には豊富な水量の水が流れる。

角を曲がると、東面になる。ここで再び、視線の展舒の方向性が変わる。大きな松の木は斜め右上に身をくねらせて伸び上がり、画面の上端から姿を消し、次の襖面に再び枝先を右下へとおろす。その松の後方に梅が見え隠れする。梅の1本は水に枝を潜らせて右に伸びる。そこには山鳩、鶯、鶺鴒と多種の鳥が羽を休めている。それらはつがいになり向き合うものが多い。視線を右に向けて右への展舒を進めるものがある。水を潜る梅の枝にとまる鶯もその1つで、右の上空に飛び交う白鷺たちに視線を送る。

その1羽が大きく身を翻させた曲芸的な姿勢をして頭を下に向けて、岸辺の白鷺に視線を返す。視線を受けた白鷺が嘴を上に向けているが、他の2羽は熱心に下を向いて何かを探しているようである。彼等のすぐ右にある葦は茎を左に傾け葉も左を指している。

その差すところは水面の鴨の群れへと繋ぐ。鴨たちは一塊になり左右の水際のモチーフから独立して水の中ほどにいる。1羽の子鴨が右から追い掛ける先に、親鴨の1羽が左を向きその先に2羽の子鴨がその親を向き、もう1羽の親がつがいの背に嘴を向けるように、親鴨を取り巻く子鴨達が集まり戯れる。視線はここに終わっている。東面の南端の筍のある竹藪が左に傾く所からゆるく斜面が水に向って下っていく先にあるのがこの鴨達の群れである。

霊雲院室中花鳥図東北西3面襖絵の視線の展舒は左から右に、右端からは左へと方向性があり、両端から始まるモチーフがつくる視線の展舒は中央へ向っている。

西南の間：《琴棋書画図》(図7) 東北面8面である。

東面4面の中央2面に陸地がある。画面右に船着き、琴を持つ童子たちが橋を渡って左の陸へと進む。その左の大きな岩の横に道士が立って待つ。その頭上に巨大な松が右上に向かって伸び、枝を右下へとおろす。其の奥にはもう1本の松が真上に向って伸び、梢をやや左に向けながら奥を指す。その指すところには高い山の端から滝が流れ落ちる。その水は滔々と先ほどの橋の下を流れて右の水辺に注ぐ。

さて、大きな松の根方を越えると、人々が碁を打っている。独り左に離れた童子が、岸の端で水を覗き込む。その水の先に対岸があり木々に葉がしっかりと付いていて、その葉影で書を読む人々

がいる。

ここから北面になる。先ほどの島の右から舟が出て、左の島に向けている。そこには亭の中で絵を見る人々がいる。2つの島の奥に、雪山が描かれる。

画面右から左へと琴棋書画の事象がつながっている。北面の中央は雪化粧の遠山が描かれる。春の景に琴棋、夏の景に書、秋の景に画と季節を絡めて事象を描く。其の季節は右から左へとすすむ。画面に見られる視線の展舒の方向性も基本的に右から左へとすすむ。右の琴の部分はやや視線を奥に送り一回りしてから左へと送るところに奥行きへの志向も見られる。

大仙院では画面上にモチーフを繋げる視線が各面ごとに完結していたものが、霊雲院ではテーマあるいは一部屋を通してひとつながりに右から左へと進んでいる。

3. 永徳 (1543 ~ 1590)

永徳は《洛中洛外図屏風》1565(永禄8)で細画を極めていたが聚光院では彼らしい障壁画を打ち出した。

大徳寺聚光院(図8)1566(永禄9)

室中:《四季花鳥図》東北西3方面全16襖面(図9)

東面南側から竹3本中2本が画面右に出る。1本は画面右端から交差しながら左上方に伸びる。上部は霞に煙って消えていく。竹の葉は左下に流れるように配される。そこに紅梅の枝が伸び掛る。紅梅の枝の強く右外に向けられた方向性が見られる。しかし、一番手前の竹幹が左から右外に向けて伸び、葉叢が左下に下ったところに紅梅の枝の細い先端が掛るが、そのまま大きく屈曲した根方に進み、這うように横たわる太い幹は大きく屈折していく。

上に折れ曲がる直前の幹の上に番の山カササギがわざわざ右の羽根を手のように挙げて左への鑑賞の視線を誘う。この部分は梅の枝も花もない。誘われた方向には、紅梅の花の中に紛れて枝にとまる鶯が口をあけて鳴いている。そのまま視線は枝をつたって紅梅の幹から離れて上空へと導かれる。そこには1羽の鶴が飛びながら左下を振り返っている。

北面の東側の襖につがいの片方が岩の上について右上を振り返っている。両鶴は視線を交わして対応する。その前を流れたっぷりした水は右奥から左下へと進む。奥深い遠山が外隈に描かれているので雪を冠っている。大量の水は、その山からの雪解け水と思われる。

近景は呱呱鳥が水辺に餌を啄みながら左向きに歩む。其の奥につがいの鴛鴦が互いに顔を向け合いながらゆったりと右に泳

いでいる。彼等の頭上には松の枝が画面上部左上から右下へ下りてくる。枝の先端は再び呱呱鳥へと向かい、今度は鶴に視線がぶつかり、鶴は右を向いて大きく嘴を開ける。此の鶴のフォルムのつくる曲線と同じラインに松の幹が左側に繰り返す。その松の木は啄木鳥を幹に乗せている。夏である。松は左にも枝を屈曲させながら伸ばす。

部屋の角を曲がった所にもう一本の松がある。ここから西面になる。此の松は太い幹を画面半ばで二方向に分ける。右側の幹は枝を左前方に出し、そこから小枝が画面から手前に向けて前進してくる。一部が左へ進む。左の幹は右に弓なりに反りながら画面上部から外に出ていく。画面最上部に一部の枝を残しながら一旦消えて、画面上部の外からゆるく湾曲しながら枝を左下に降ろしてくる。

おりてくる枝の先には芙蓉が花を咲かせている。幹とおりてくる枝に囲まれた空間に鶴が頭を右下に降ろし餌を啄む。其のフォルムは太い幹の弓なりと反対に反る弓なりになっている。その左の芙蓉の一枝が左上部に向う。その先には空から下りてくる雁が見える。雁が頭を向ける左下には、岸辺に蘆が葉先を向けて迎える。その後ろに蘆と同じラインになった雁が頸を伸ばす。もう一羽は背中羽根を繕うように左に頭を返している。

東面と西面は左への視線の誘導がかなりしっかり描かれていた。

しかし、北面は両端から中央へと進む方向性が画面中央で交差し、同時に両端には左右外側へと広がるモチーフの方向性も見られる。画面の右半分は奥深い所にあるモチーフが描かれるが、左半分は近接する所にあるモチーフが描かれていて、右側の奥深いところから左側の近接する処へのモチーフの前後感が生み出す方向性を考えれば、右から左へという展舒は存在するといえる。

檀那の間:《琴棋書画図》(図10)

この部屋は東面と北面に襖があり、東面に琴棋が北面に書画が描かれる。

東面の南端に松が一本あり、幹は左に傾きながら画面外に出ていく。その松の左に大きく伸びる枝が画面最上部まで伸びあがり、そこから左に曲がって下りていく。その奥の大きな平岩の前に琴を引く人物を中心に2人の聞き手と二人の童子が描かれる。琴の弾き手が左を向くと左の人物が右を向きその視線を受けて右の人物が幾分顔を琴の弾き手方向に向けて3人で視線は完結している。弾き手の戻った視線は脇に座る童子の視線が左手に向っていて、左への方向性を持つ。

左に進むと松の枝先がありその幹が左に傾きさらにそこから伸

びる枝々が左へ大きく伸びる。その枝の一つの下に舟があり乗っている人々が左を見ている。その視線の先には対岸の亭がある。そこで、2人の人物が将棋を楽しんで1人がそれを欄干に寄り掛けながら見ている。周囲には、竹藪、広葉樹が葉をつけている。また松も岩山の上から立ち上がり梢を上空の雲に消す。これらの木々はいずれも枝を右方向に向けている。

亭から続く道があり手前の岩の塊の奥の灌木の幹や枝が左を向き、視線を左へ方向づける。そこには童子たちが机の上にもものを並べて準備している。画面左端は垂直に伸びる広葉樹が3本立ち上がる。其の枝の一部は部屋の角を曲がり続く北面の襖画面に下り掛る。

この北面は、画面上部に奥深い山の淵から滔々と流れる水脈が続き、大きな湖へと繋がる。その画面左端手前のまっすぐ伸びた棕櫚の木々の下に立って書物を広げる人々と童子たちが集う場面が描かれる。

その左にある灌木は枝を左へと向ける。そこに橋があり、右へ向ってくる道士と連れの童子たちがその橋を渡ろうと右を向いている。その後方画面最前列にある岩を過ぎると、荷を持つ童子が左へ進む。その左前に風に吹かれて大きく右に流されている枝々のある柳、横に左へ大きく湾曲した枝に残りの葉がわずかに付く灌木が左奥を示す。

その先の建物の中で軸を掛け、横の机に向い筆を取る人物と童子たちがいる。この人物たちの視線も完結している。この建物の上方遥かに高い所に葉を落とした枯れ木が右に枝をのばして描かれる。その間に白雪を被った遠山が高い機鋒を見せる。

右側の春に始まり、左に進むにつれて夏、秋と季節が進み、最後の秋の後方に雪山を描き冬を示す。

それと同じく視線が東面南端から左に向う。しかし、北面は西の端から右に向けて視線の展舒が進む。両者の交差する北東の角に縦方向に伸びる樹木を描き、此処に視線は集約される。一方向に視線が展舒するように計画されるのではなく、中央に集まるようにモチーフが視線の方向性を造り出している。

基本的には左へ視線展舒を行いつつも、最後に中央に返す形を取っている。

4. 光信 (1565 ~ 1608)

光信は永徳の長男であるが、永徳とは異なる趣の障壁画を園城寺勸学院と伏見城遺構と言われる都久夫須麻神社本殿1602(慶長7)年に残している。

園城寺勸学院(図11)1600(慶長8)年

一之間:《四季花鳥画》(図12)西に床、北東南面に襖。

西面は床貼付瀑布図で、左端に滝が描かれ、落ちた水は右に進む。

北面の西端から白梅の細い木が屈曲しながら右に折れ曲がり長く伸びて視線を右へ誘導する。その枝は先端が画面奥に向う。その先に画面上部から下りかかる桧の枝がある。幹が左に弓なりになった2本の桧の奥に、真っすぐに伸びる桧数本が続き、更に奥には右に弓なりになった桧の幹が右奥へと連続していく。その右には桧の梢部分の緑が右へと視線を繋ぐ。右下端は近接した部分になり金雲の奥に梢の緑の葉叢が右上がりに続き、北東の角になり東面につながる。

東面は北面に連続して梢の緑の葉叢が右下がりに連続する。その梢の奥に山桜が咲きかける。樹木は広葉樹がしっかり葉をつけたものになり、大きな八重桜が満開の球形の丸い花をつける。八重桜も数本奥に続き、金雲に上方を隠される。根元には椿の赤い花が咲きかかる。画面上から右下に下りてきた桜の枝の下には、芍薬の花が伸びやかに上を向く。岩陰の数本の芍薬の右端の木は右手へ傾き、右方向に視線を誘う。その先にある赤と白の背の高い花木(海棠)が左から右へと視線を繋ぐ。

南面は海棠の花の右に、水の流れが画面中ほどから右に左に折れ曲がりながら右へと流れていく。右端に細い花木数本が右に弓なりになって立ちあがり、次々に右奥へと並んで続いていく。上方は金雲で隠されている。

モチーフの形状や配置で明快な左から右へ時計回りの視線の誘導が行われている。

5. 貞信 (1597 ~ 1623)

光信の子で狩野家の惣領であったが若くして亡くなっている。名古屋城本丸御殿では中心人物で、表書院の上段之間を担当していたらしい。

名古屋城本丸御殿表書院(図13)1614(慶長19)年

上段の間:北面に床貼付松図と右に違棚奥壁貼付絵、東側に帳台構梅禽鳥図、南面に松竹禽鳥図、西面は腰貼付に笹に薔薇図、付け書院障子腰貼付絵笹に薔薇鶺鴒流水図がある。(図14)

北面床壁貼付絵の松は床の右下隅から左斜め上に伸び上がっていく。違棚奥壁の絵は水辺の梅とあるがはっきりしく不明である。

東面帳台構左下角に土坡がありそこから右斜め上に向けて梅が屈曲しながら伸び上部の枠で一旦消え、再び画面中央の上部から右下がりに下りてくる。右端に鳥が一羽その梅を見ているように配置されている。鳥はもう一羽が画面外に出ていく梅の下

に描かれ、顔は右を向き、右への視線を向けていく。

南面は東から流水に始まる。その上空を4羽の鳥が2羽ずつ左上に飛んでいく。松は右から2枚目の襖の下部から始まりすぐに二方向に分かれる。左上斜めに伸びる幹は途中から垂直に伸び上がる。そこで一本の枝が幹の後に曲がり込みその先に葉叢が付き幹の下に広がる。上方では葉叢が右方に伸びて終わる。

一方、右に分かれた幹は垂直に上がるとしばらくして大きく左右に分れ、右枝は弓型を繰り返しながら横に這うように右伸び最後に葉叢をつける。松の後方に岩がある。松の下に笹の先端が描かれその手前に土坡が右へと続く。土坡の上に赤と白の薔薇が描かれる。上部は金雲と金霞が重なっている。松が上部まで伸びているがその他ほとんどのモチーフは画面下方に置かれる。松を挟んで左前の岩と右後の岩が画面に前と後ろの奥行きを形成している。

西面は腰貼付絵であり、左の2面は土坡が続きその上に笹と薔薇が描かれる。薔薇の下に土坡があったらしいが剥落ではっきりしない。薔薇は右に伸びていくように描かれ視線は右へと誘導されている。右の付け書院障子の腰貼付絵4面は、左から土坡が伸びその上に笹と薔薇が右へ枝を伸ばしている。その先の画面に鶴鴒が岩に停まっているらしいが岩は剥落して見えない。鶴鴒は顔を下に向け、鶴鴒のとまる岩の後に、流水がその右の画面からこの岩へと降りて来る。

北面の床壁貼付絵の松が画面左に枝葉を伸ばして視線は左へと進み、付け書院障子の腰貼付絵4面の一番右の流水から岩の上の下向きの鶴鴒へと左への視線がある。しかし、左の2面の薔薇が枝先を右に向けていてこの鶴鴒が視線の終息の所になっている。

一方東面の帳台構では梅が右に伸び、一旦画面を出てから再び戻って右へと進める。禽鳥は右端のものが左を向いて梅の下にいる鳥に視線を返している。梅の下は鳥は視線を右にして再び右への視線を造る。

南面に移行すると東端上方に4羽の鳥が画面を出て行こうとするように右を向いて飛んでいる。下部には流水がある。この水は恐らく違棚奥壁貼付絵水辺の梅から帳台構の下部に続き、南面左2面までで松の所でなくなる。松の木が幹は左方に伸びながら右上方へ曲がりこむことで結局右へと視線を誘導する。それを右への枝が補強する。右側の枝の上にいるつがいの鳥は視線を左に向けるものと下を向くものがいて下への視線を誘導する。下には笹から始まる低木の花弁が右への視線を繋ぐ。ここから

画面に小丘が西面へと続く。

視線は基本的には右向き時計回りに誘導されている。しかし、床から付け書院障子当りには一部左まわりも導入されている。

6. 探幽 (1602 ~ 1674)

貞信亡きあと、光信の弟孝信の3人の子供たちが狩野派を引っ張っていく。中でも才能あふれた守信(探幽)が中心になって徳川家の絵画の仕事をしていった。二条城二の丸御殿では狩野派内部で認められて中心になっていった。名古屋城上洛殿では宗家の弟安信ではなく、守信(探幽)が中心になって制作した。その後長い生涯に作品を数多く制作した。名古屋城上洛殿で新しい様式を打ち出した。

二条城二の丸御殿 大広間(図15)1626(寛永3年):松に禽鳥図⁷

一之間(図16):

北側床貼付は松が上に上がり、左に向けて折れ曲がり、先端の枝が左下がりになり画面中央に葉叢が置かれる。横の違棚奥壁貼付絵の竹も左に傾く。

左に向う視線に沿い西面を見る。付け書院障子腰貼付絵は蘭が描かれ、蘭の細い葉が左方向に進み始めるが途中で右方向に変わる。西面の襖は太い幹の松が右に向けて立ち上るものと、下りるもので出来ている。いずれも右への視線の方向性を持つ。

一方、東面は帳台構とその南に2面の壁貼付絵があり太い松の幹が右に斜めに伸びていく。右に湾曲しながら左上に伸びる。しかし、右斜めにも枝を落とす。松の梢の下の帳台構にはつがいの鳥がいる。

この部屋ではモチーフが床間のある方向に向けて西東面とも視線を展舒する役割をしている。

二之間(図17)

西面は松が右に湾曲しながら左上に伸びる。最先端部の葉叢も、下の方の葉叢も左へ伸びて視線を左へと展舒する。奥部の小壁の空中と下部の地上とで孔雀の番が向き合っている。下の孔雀の前に流水があり左へと流れる。

東面は右の4面が三之間との境になっている。そこに松が左を目指して太い幹を画面右下端から左上への対角線上を横たえている。根方に近い所で、右を向く枝が横に伸びて沢山の葉叢をつけ、先端は南面に及ぶ。松の左端先端に向けて孔雀が顔を右

⁷ 襖だけではなく、長押上小壁にも絵がある。

に向ける。

南面は松が左にやや弓なりになりながら上方に伸び上がる。孔雀が松の根方近くの幹にのっている。遠くに遠山が見えるように上方に描かれる。右端から流水が左を向けて流れる。

この部屋は一之間と続きになっているため一之間の視線の展舒で、上段の床間に向けて進む。床の対極になる南面は床貼付と反対の右方向に松が伸び、視線は右へと誘導される。しかし、下部の流水は逆に右から左へと西面から南面に流れる。南面は両方の視線が混ざり合う所になっている。

三之間(図18)

西面は二之間との境になっている。そこは松が右下から少し上がってそのまま左横に多少屈曲しながら画面中央まで伸びて終わる。左下端に笹が少し描かれる。

北面は壁貼付2面に松の根に近い部分の太い幹が右上斜めに伸びる。その上に孔雀が右を向いてとまる。長押上小壁に枝と葉叢が描かれ、残りは右の襖に伸びる。襖の上では幹が右下がりにゆっくりと下がり、襖4面中の3枚目の襖に終る。

東側は南端に根を持つ松の幹が長押上小壁に上がり、すぐに左下に下りて来て画面下部に近い所で葉叢を描く。

南面は東面の太い松が弓なりになって右上に上がり長押上小壁にのみ枝を伸ばし葉叢をつける。画面右半分には岩と花のある低木が描かれ、右端に笹が描かれる。

この部屋は北西の角と、東南の角に松の根元がありそこから左右に松モチーフは広がり視線も同様に広がっている。

実際に着座した時、北西東面には松が襖中央部に見える。南面では上部に少し葉叢があり根方が少し視野に入るだけになっていて、むしろ岩や花卉や笹が襖の下部にあって左に枝先を見せることから多少右方向すなわち二之間への視線を意識したもののらしい。

大広間は時計回りとか部屋をめぐる視線より、床や上段への視線を意識してモチーフの視線展舒の方向性が意識されている。

名古屋城上洛殿(図19)1634(寛永11年)

上段の間:《帝鑑図》(図20)北面床貼付「遣倭謝相」東面「不用利口」南面「露台惜費」西面「高士渡橋」の4図

北面床貼付は建築モチーフが右上から左下へのラインに沿って描かれる。視線は右上から左下への方向性を持つ。しかし、その先に二人の人物が右に向けて歩いていて右に視線を戻す。その先にある半分描かれた建物の中の人物に外から跪く男がいる。此の男が右を向くことで視線を右へと方向付ける。違棚奥壁貼付絵は建築モチーフの横線が右へ伸び、一旦折れ、再び右の

横線の順に右へと伸びる。

東面帳台構は左端襖に太い広葉樹が左に弓なりになりながら立ちあがる。枝は左下と右上に伸びる。その右の建物が右下下がりラインで描かれ、内部の人物も右下方向を向き、外の人物も同じラインに沿って配置される。建物角の外に跪く男が右手で右後方の鶴を指す。鶴の視線が右への方向を向ける。その先に岩があり、右下に八角形の花壇がある。

なお長押上小壁に建物と橋と樹木があり、後方に遠山が描かれる。

南面は左から枯れ木の混ざった林が遠くに見え手前に小滝が流れ落ちる。奥に3人物が右の囲まれた仕切に進みその右に階段が右下に降りて来る。宮殿内部に腰掛ける皇帝の前の外に跪く人物が右を向く。その目線の先にぎゅーと葉をつけた太い幹が左に弓なりになり立ちあがる。葉をつけた枝が右下に下りる。

西面は左端に松が右上に伸び、途中から枝が右に下がる。その下の橋を高士達が右へ進むが前の2人は後を振り返る。更に右へと行くと橋の登り口の下に2人が木陰に佇む。その右にまっすぐに伸びる樹木が枝を右下に下ろして、その先に白い花の咲く梅の様な花卉が右に伸びる。

視線の展舒の方向性が右に向い、全体に部屋を時計回りに進んでいく。

一之間:《帝鑑図》(図21)北面「明弁詐書」東面「褒獎守令」南面「高士」西面「蒲輪徴賢」の4図

北面は上段の間との境である。左端に太い樹木が上に伸びて、一旦画面外に出て、再び枝が右下に差しかかる。右上に伸びるラインに沿って建物が描かれ内部に皇帝が腰掛けその前に冠を外した人物が跪く。外に、建物と平行のラインに折れ曲がる欄干があり、その下には水が流れる。水は右へと流れている。右下端に樹木が左を向き、その手前に岩が角を瘤にして、渦を巻く様な形に終る。

東面は、二之間との境である。左端の遠山の前に枯れ枝と葉の茂った木々のある林が右下がりに描かれる。画面下辺に至って、濃く葉を描く樹木とまばらに葉の付く樹木の後ろに、瓦屋根の塀と番人の立つ門に続く。塀の奥に宮廷の建物とその前の広場に、正面向きの人物たちの前に人物が右を向いて跪いている。視線が右方向を示す。垂れ下がる枝を辿り、幹をカクカク屈曲させながら降りて右下角に着く。

南面は松がまっすぐに立ちあがり枝を右下に落とす。その高い位置の横に茂った樹木に囲まれた家の瓦屋根が見える。近景では高士達は話し合いながら左へと歩む。先頭の人物が振り返りながら右をむくが、その先にあるものは下端すれすれに描かれた

樹木と土坡で、それらは左へ伸びたり傾いたりして視線を左へ方向づける。馬車が右向きに設定されている。その右に茅葺の門外に3人物が立ち話している。右上に茅葺の家が木々に囲まれて描かれる。手前に竹が左に撓っている。右端の樹木の葉は北面左端の樹木と同じものである。

この部屋も時計回りにモチーフによる視線の誘導がなされる。

二之間:《琴棋書画図》(図22)北面床貼付「書」東面「棋」南面「書画」西面「琴」の4図

北面床貼付の右端に滝が流れ落ち、水が中央へ流れる。そこに亭がありその中に人物がいる。画面中央に松が左に伸び、頂点で左右に枝を振り分けて降ろす。右下へ降りる枝が亭の屋根の斜線へ続き、視線が右へ進む。右の壁貼付には竹が右へなびきながら右へ視線をつづける。

東面には左下辺の岩と樹木に始まり、その上方に柳の根元が描かれ、右に下がる柳の葉の奥にある家の戸口に立つ童子と、入口前の突き出した岸で柳の下に衝立を立てて囲碁を打つ男女が描かれる。周囲は流れる水に囲まれている。岸が指す右手には舟に暮らす人々が描かれ、近くの岸には蘆が茂っている。右端の蘆が右に傾き右を指し示す。

南面は書を読む人が乗った舟が右に進む。前方にある柳の枝が垂れかかる下に童子が舟の方に手を差し伸べている。柳の反対側には、絵を見る人々がいる。その先は広葉樹の太い幹が3本根方を立ち並ぶ。その上方に茅葺屋根の家が茂って木々に囲まれている様子が見える。奥には山がみえる。

西面は広葉樹が根方から立ちあがり梢を雲間に隠し再び枝先を降ろす。その木の奥に高蘭の前に座り琴を引く人物の前に2人左横に1人座って聞いている。枝先の下りてきた下に童子が手に籠を下げて右に進み橋を渡っていく。とうとうと流れる水のある川である。そこから遙かに行くと一人が琴を持つ4人の人物が左に向けて進む。その後ろの木は右に大きく傾いて右への方向性を示す。

この部屋も時計回りにモチーフは視線を誘導する。

三之間:《四季花鳥図》(図23)北面「雪中梅竹鳥」東面「雪中竹林鳩雀」南面「柳鶯芙蓉」西面「蘆鶯瀑辺松樹」の4図

北面は右端に雪を冠った竹の前に梅の太い幹がまっすぐに立ちあがる。左に折れて再び上に伸び上がり、最上部から左斜めに枝を下ろす。その先に尾長鳥が左下に向って飛んでいく。梅があることで春を表現する。

左に向う視線に従って西面を見る。下辺に沿って蘆が生える。右側の蓮葉の横に3羽の白鷺がいて、1羽が左を向く。その先の

空に飛ぶ鷺がこちらを見返している。蘆が1本左に大きく傾き左へ繋ぐ。左側奥から流水が右にむかい小滝となって右に落ちる。そこにある松が、画面上部で一旦消える。すぐ右上から松の枝が右と左に下りて来ている。右枝は滝の上にかかるように、左枝は斜め左下にはっきりと下りて左への視線を誘導する。

南面は中央に葉の無い柳と、その左に芙蓉の花が咲き、もう一本の太い柳の幹が左に伸び、その上に鷺が3羽とまっている。3羽とも左を向く。一方右端には尾長鳥が空中に飛んでいる。尾が真っ直ぐに下に下りている。

東面は雀が2羽左へ向けて飛ぶ。画面中央右下辺に笹が見え、とげのある茎が上方に向う。その左に竹が2-3本ずつ次第に左下がりにながら描かれる。そこにも鳥が左に向けて飛ぶ。左端の竹の幹の上部の枝には鳩がとまる。葉の上に雪が積もってその上にも鳩がいる。鳩の左側に竹の枝が左に飛びだしている。

この部屋はモチーフによって、時計と逆に左回りに回っていく。同時に四季が北→西→南→東と面をかえて、右から左へと進行している。

結語

以上のように狩野派を見ていくと、元信の晩年に部屋を廻る視線の方向性が考えられている事がわかる。しかし、それは完全ではなく部屋の各面での完結性にまだ重きが置かれているようである。

永徳になって時計と反対回りになりながら部屋という一面だけの画面からもっと大きな空間を意識し始めている事がわかる。

光信は元信の時代に戻るように時計回りに部屋を回るという父とは異なりながらも、父永徳を意識した部屋空間での絵画を制作していた。子の貞信はまだ完成する前の形ながら、時計回りを基本にしながらも一部に視線の展舒を逆に進ませている。しかし、部屋という空間をもとに絵画面面を意識していた。

探幽は、まず中心を上段に将軍などの存在を意識した視線の展舒をつくった。名古屋城上洛殿においては、中国のテーマである帝鑑図や琴棋書画図は時計回りに、花鳥画は逆回りと主題と回り方を考慮してモチーフの配置や形状が配置されている。障壁画が室内空間四方に描かれるということがすでに基本的な考えに定着していたと考えられる。

このように平面に描いていた時代から室内空間に描くと言うことが定着していく様子が確かめられた。

参考文献

- 1 武田恒夫「障壁画」日本の美術17 小学館 1971・5
- 2 武田恒夫「元信 永徳 探幽」日本の美術53 小学館 1979・2
- 3 武田恒夫「狩野探幽」日本美術絵画館15 集英社 1980・5
- 4 武田恒夫「近世初期障壁画の研究」吉川弘文館 1983・2
- 5 武田恒夫「名古屋城本丸御殿障壁画集」名古屋市 1990・3
- 6 武田恒夫「狩野派絵画史」吉川弘文館 1995・12
- 7 山根有三「大徳寺」日本古寺美術全集23 集英社 1979・9
- 8 土居次義「狩野永徳／光信」日本美術絵画館9 集英社 1981・4
- 9 山岡泰造「狩野正信／元信」日本美術絵画館7 集英社 1981・9
- 10 鈴木廣之「永徳・等伯」名宝日本の美術 小学館 1991・7
- 11 松木寛「御用絵師 狩野家の血と力」講談社 1994・10
- 12 京都国立博物館「室町時代の狩野派」中央公論美術出版 1999・4
- 13「名古屋城」障壁画全集 美術出版社 1967・6
- 14「大徳寺真珠庵・聚光院」障壁画全集 美術出版社 1971・6
- 15「元離宮 二条城」小学館 1974・11
- 16「本丸御殿の至宝 重要文化財 名古屋城障壁画」名古屋博物館 2007・4
- 17 西和夫「大仙院本堂・霊雲院方丈の復元平面と狩野元信筆障壁画」建築と障壁画の総合的検討 建築年報108 1991・9
- 18 小川裕充「大仙院方丈襖絵考上中下一方丈襖絵の全体計画と東洋障壁画史に占めるその史的位置(一)」国華 1120-22 1989・1～3
- 19 並木誠士「大徳寺大仙院檀那之間襖絵について：その革新性についての考察」京都大学研究紀要8 1987・
- 20「生誕四〇〇年記念 狩野探幽展」図録 日本経済新聞社 2002・10

図はすべて参考文献中から作成されたものである。

参照挿図



図 1

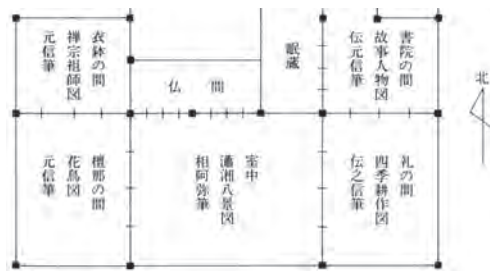


図 2 大仙院方丈平面略図



図 3



図 4-1



図4-2

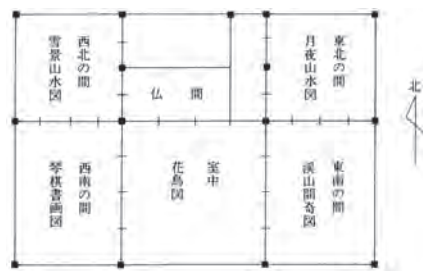


図5 霊雲院方丈平面略図



図6-1



図6-2



図6-3



図7-1



図7-2

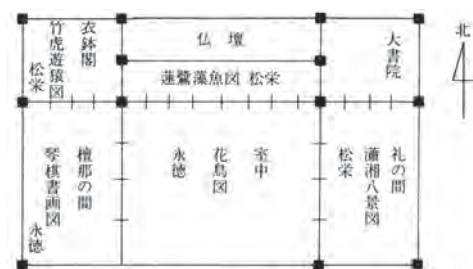


図8 聚光院方丈平面略図(復元後)



图9-1



图9-2



图9-3



图10-1



図10-2

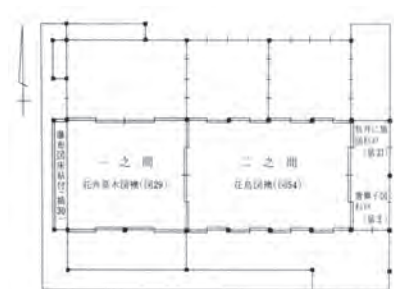


図11 勧学院平面図



図12



図13 表書院平面図



图 14-1

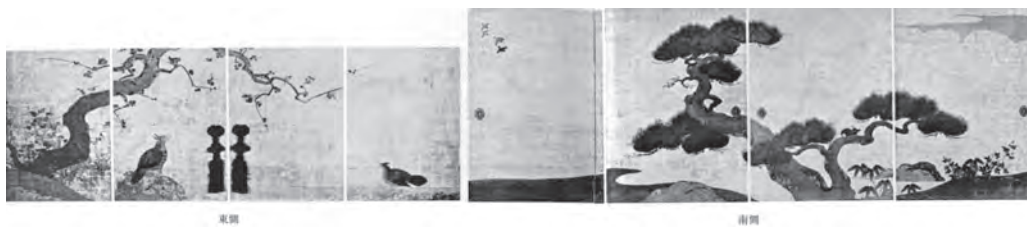


图 14-2



图 14-3

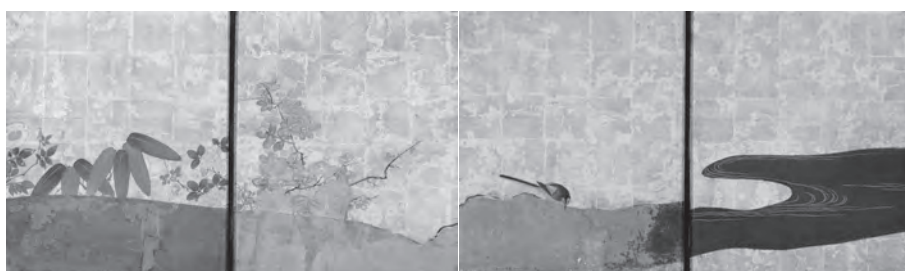
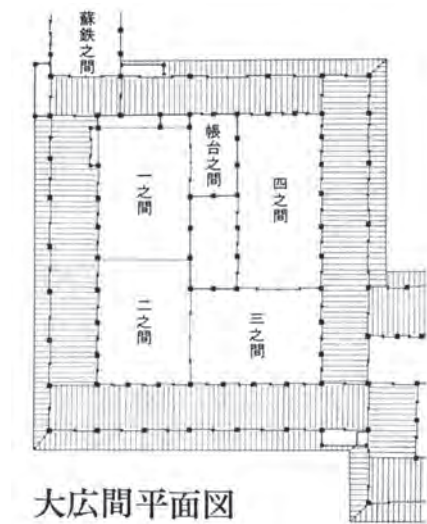


图 14-4



大広間平面図

図15



図16-1



図16-2



图 16-3



图 16-4



图 17-1



图 17-2



図17-3



図18-1

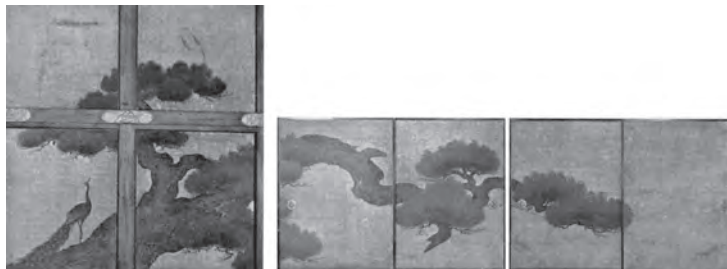


図18-2



図18-3

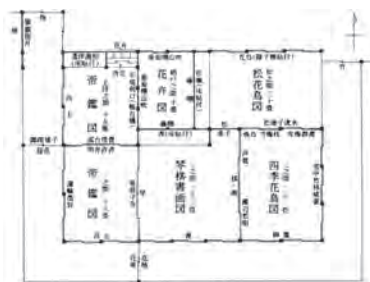


图19 上洛殿平面图



图20-1



图20-2



图20-3



图20-4



図20-5



図21-1

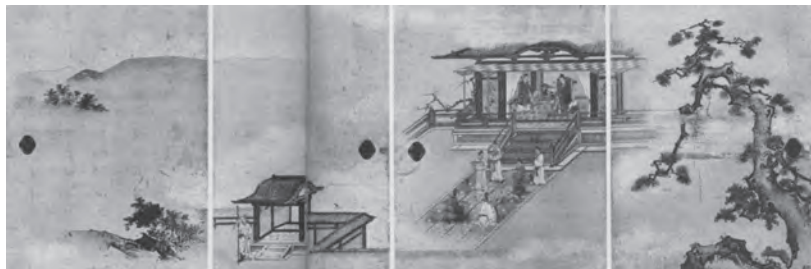


図21-2

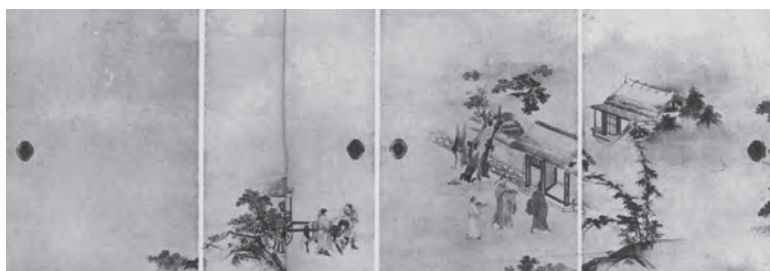


図21-3



图 21-4



图 22-1



图 22-2



图 22-3



图 22-4



図 22-5

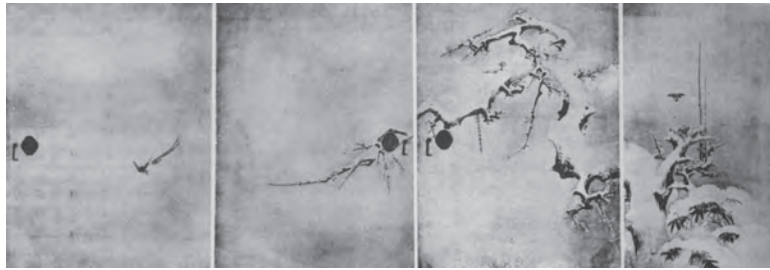


図 23-1

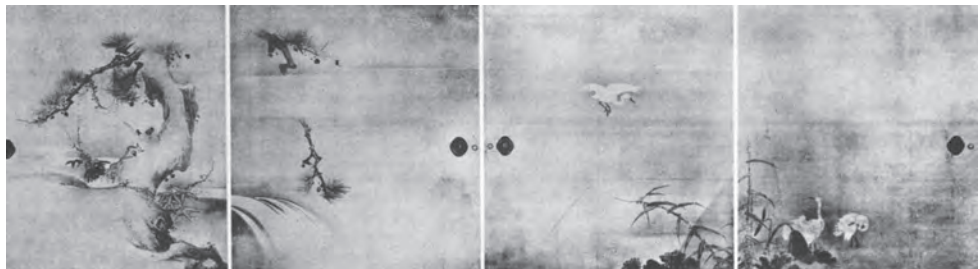


図 23-2

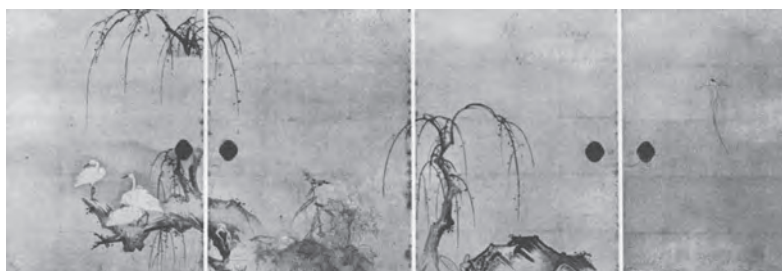


図 23-3



图 23-4